

職員の皆さんへ

新年度が始まってから3カ月が経過し、あっという間に7月になりました。

今日のこの日は「平戸市職員自戒の日」です。これは過去の市職員による「不祥事」を機に、重大な使命と責任をもって行政を行なう公務員として、市民の皆様への期待と信頼にしっかりと応えることが出来ているかどうかについて改めて自己反省を行うこととした節目の日です。

そこで少し長くなりますが、今回は私がこれまでに観た映画作品の中から特に感じたことを書かせていただきます。

私は学生時代から黒澤明監督の作品が大好きで26作品全てを鑑賞している「黒澤マニア」です。その中に志村喬主演の『生きる』がありますが、先日この懐かしい映画がNHKのBSプレミアムで放送されました。これは1952年に全国ロードショーとなった作品ですが、これは志村喬扮する、とある市役所の市民課長として30年間無欠勤で務める渡邊勘治という男が主人公の物語です。

映画の冒頭にいきなりレントゲン写真が映し出されます。これはある日のこと体調不良のため医師の診察を受けた渡邊の胃ガンの写真です。当時、ガンは文字通り「死の宣告」を意味するほど致命的な病気でした。従って患者本人への告知はタブーでしたが、ふとしたことから渡邊は自らのガンを知ることとなります。妻に先立たれ、一人息子とその若妻からは疎ましがられ、孤独の中で老いるの恋にのめりこみそうにもなりますが、最後には住民の強い願いであった公園の建設に邁進することになります。

(ここに出てくる「市民課」の設定は、私どもの市民課と業務内容が違うようです。)

映画の中で建設されることになった公園は、もともと地域の「吹き溜まり」的な場所で、宅地としての価値もなく、不衛生で下水の匂いが常に漂い、何の活用にも適さない場所でした。住民からは、子どもの遊び場もないことから公園を整備するのが最適だという提案を受けるのですが、役所では相談を受けた市民課に始まって都市計画課、土木課、衛生課、農業委員会、教育委員会など次々と「所管が違う」と断られ、あげくには市議会議員の口利きを経て、助役まで届くのですが、肝心の助役からは「皆さんの要望を受ける窓口の市民課に案内します」と言われて、結局庁内のあちこちに行かされた結果、市民課にたどり着くというまさに「たらい回し」だったのです。

その後ようやく工事が始まり渡邊の地道で精力的な努力の末に公園は完成するのですが、ある雪の降る寒い晩に渡邊は、独り公園のブランコに揺られ「命短し」の歌を口ずさみながら息を引き取るのです。

映画は二部構成となっており、後半はこれまたいきなり渡邊市民課長の葬式

の場面から再スタートとなります。通夜に参列した中村伸郎 扮する助役その他、関係職員たちが、「なぜ渡邊さんは人が変わったように公園建設に必死になったのだろう」ということが話題になります。

それぞれの断片的なわずかな情報をつなぎ合わせながら想像を巡らすのですが、どうしても思い当たる節が見たらない。しかし時間とともに弔問に訪れる地域の婦人の方々や死体発見者である巡査の言葉を聞くにつけ、渡邊は実は自らの寿命を知っていて、そのことを身内にも打ち明けることなく、まさに「身命を賭して」この事業の実現に邁進したのだという結論に達します。

そして助役や上層部が帰ったあと、「渡邊市民課長に続け！俺も明日からがんばるぞ！」とそれぞれの職員が酒の勢いもあって市役所の改革が進むかのように盛り上がるのです。

でも、翌日の映画の場面はいつもの市役所の縦割り行政、事なかれ主義が繰り返されるといふ悲喜劇で幕が閉じます。融通の利かない役所体質への痛烈な黒澤ならではの批判映画なのです。

繰り返しますが、これは半世紀以上前の作品です。果たして私たちの市役所はこの映画の厳しい指摘から脱出することができているのでしょうか。この作品から 65 年後の未来の姿としての進化が見える形でできているのでしょうか、改めて今日のこの日を機に、私を含む全職員がしばし「自戒の念」に浸ってみることも深く意義あることと思います。

現在、平戸市総合計画が策定されつつあります。その中に、「職員の意識改革」という項目がありますが、具体的にどうやったら「意識」が「改革」されるのでしょうか。そのことを職員一人ひとりが考えなければなりません。確かに、市民のニーズや価値観の変遷、国からの法令の改正に関連する複雑かつ様々な対応に追われて毎日の業務をこなすことで精一杯かもしれません。ただし、それは「当たり前」のことではないでしょうか。

市民は何をもって「市役所の職員が変わった」「意識改革がなされ進化している」と評価してくださるのでしょうか。その観点が大事であり、そこに視点を移動して自らを省みなければ「職員の意識改革」は実現できないと思います。

ぜひとも皆さんも一度、この映画を観てください。CD レンタルショップでも貸出しています。そしてこの映画の市民課長の死に物狂いの活動から学んでください。立場を超え、市民のために命がけで職務を果たすことこそが私たちの意識改革の本懐ではないでしょうか。それは身近なボランティア活動でも構いません。確かにそんなボランティアをしなくてもその任務にあたる人が別にいるでしょうし、お金を払えば誰かがその業務をしてくれるかもしれません。とにかく定年退職するまで大過なく過ごすことでは市民の期待に応えることができないという意識を持つことが重要です。

市長という立場からこのようなことを職員各位に言葉にして示すことは少し控えなければならないことかもしれません。しかし、今こそ総合計画に「職員の意識改革」を掲げるとするならば、そうした意気込みを皆さんとともに共有することが第一歩であるという私自身の強い認識の現れだと思っているのです。どうかご理解いただき、ともに市役所改革に向けて努力してまいりましょう。

先月の定例部長会では「職員の意識改革」の具体的な行動として、「一課一ボランティア」と「一人一感想文」という取組みを私から提案させていただきました。「感想文」は小説でもノンフィクションでも構いませんし、映画や演劇でも構いません。感動したことが自分自身に刺激を与え、改革への意欲をもたらしてくれるはずです。そしてその「感想文」をできることなら私にも紹介してください。感動を共有し自らが過去の自分と決別し新たに生まれ変わるこそが意識改革につながると思います。65年前の志村 喬さん扮する市民課長に笑われないように、成長していきたいものです。

今日は特別に「平戸市職員自戒の日」に際しての私の感想文とご提案でした。

これから本格的な夏が到来します。熱中症などにならないよう身体のコンディションを整え、市民の皆様のご期待に応えるべく、今月もともに頑張ってまいりましょう。

平成 29 年 7 月 3 日

平戸市長 黒 田 成 彦